

コミュニティ・スクールの効果と課題

—教諭を対象とした調査から—

長友 義彦・静屋 智・池田 廣司・前原 隆志*¹

The Effect and Issues of Community Schools
From the Survey on Teachers

NAGATOMO Yoshihiko, SHIZUYA Satoru, IKEDA Hiroshi, MAEHARA Takashi*¹

(Received August 2, 2018)

キーワード：コミュニティ・スクール、学校運営協議会制度、地域づくり

はじめに

現在の日本における人口減少・超高齢化、都市圏への人口集中は非常に大きな問題となっており、地方創生は国の大きな課題である。その課題解決にコミュニティ・スクールが一つの鍵を握っている。なぜなら、コミュニティ・スクールの取組は、地域の人々の参画による学校支援活動や学校関係者評価などに加え、地域の人々を対象とした講座の開催や児童生徒ともに大人が活動する場所が提供されるなど、学校を核とした地域づくりの取組に結びついていることが成果として報告されているためである⁽¹⁾。こうしたことから、平成30年6月に閣議決定された「第3期教育振興基本計画」（平成30年度～平成34年度）においても、教育政策の目標「(6) 家庭・地域の教育力の向上、学校との連携・協働の推進」に位置づけられ「地域住民や保護者等が学校運営に参画する仕組みである学校運営協議会制度を全ての公立学校において導入することを目指し、各地域における推進を担う人材の確保・育成等を通じて、コミュニティ・スクールの導入の促進及び運営の充実を図る。」としている。

このような動きは、コミュニティ・スクールを導入した学校数の増加にみることができ（図1）。平成26年4月1日時点では、1,919校（幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）であったコミュニティ・スクールは、平成30年4月1日時点で5,432校（幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校・中等教育学校・高等学校・特別支援学校）と増加しており、今後もその傾向は続いていくものと思われる。

本稿では、こうしたコミュニティ・スクールの指定にとともに、どのような教育効果が生じるかについて、教員を対象に実施した質問紙調査から検討を進めていきたい。

1. 調査の概要

本調査は、平成28年度文部科学省指定事業である「学校の総合マネジメント力の強化に関する調査研究 B地域との協働による支援事業」（「コミュニティ・スクールにおける学力向上・学習意欲向上や生徒指導上の課題解決、地域連携の取組の組織化などにおける成果検証にかかる調査研究」）において実施したものである。この調査では、平成28年9月～11月にかけて山口県下の小学校267校、中学校125校の校長、教頭・

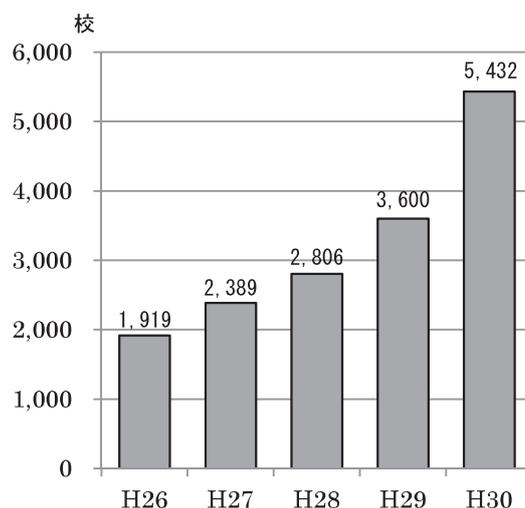


図1 コミュニティ・スクール導入状況
(文部科学省資料より筆者作成)

* 1 防府市立右田中学校

教職員（養護教諭、栄養教諭・学校栄養職員、学校事務職員は別様）に対して質問紙調査を実施した。

本稿では、この調査のうち山口県下の小学校教諭（助教諭）4,104名、中学校教諭（助教諭を含む）2,587名、計6,691名を対象に実施した質問紙調査について考察するものである。

1-1 質問項目

まず、フェイスシートには、①職種、②年齢、③教職経験年数、④勤務校の在籍年数、⑤勤務校のコミュニティ・スクール指定期間を尋ねた。次に、質問紙は、山口県教育委員会が示しているコミュニティ・スクールの三つの機能「学校運営（学校運営の質の向上）」、「学校支援（学校教育の質の向上）」、「地域貢献（学校を核とした人づくり・地域づくり）」を大項目として構成し、それぞれに中項目を設けた（表1）。

表1 各質問の構成と回答方式

大項目	中項目	質問項目（小項目）	回答方式
学校運営	広報	6(1)～(2)	4件法により回答
	小中連携	6(3)～(6)	4件法により回答
	学力	6(7)～(11)	4件法により回答
	教職員の意識	6(12)～(15)、7(23)、8(15)～(16)	4件法により回答
	学校運営協議会	6(16)～(20)	4件法により回答
学校支援	地域・保護者の協力	6(21)、7(1)～(3)	4件法により回答
	学習支援	7(4)～(10)	4件法により回答
	社会性	7(11)～(22)	4件法により回答
地域貢献	地域への関心	8(1)～(6)	4件法により回答
	地域の変化	8(7)～(14)	4件法により回答

2. 調査の結果

2-1 尺度の数値化

4,587名（68.6%）から回答があり、無記入等の欠損値のあるものを除いた3,900名（58.3%）を有効回答とした。質問項目について、「まったくあてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「ややあてはまる」を3点、「あてはまる」を4点として計算した（質問項目6(15)は逆転項目のため調整）。

2-2 項目の精選と因子構造の検討

まず、天井効果とフロア効果を確認するために、各質問項目の平均と標準偏差を算出した（表2）。その結果、問6(14)、問7(7)、問7(19)において天井効果（平均値+標準偏差 \geq 4.00）がみられ、問7(6)においてフロア効果（平均値-標準偏差 \leq 1.00）が見られたため、この4項目は以降の分析から除外した。

次に、残りの60項目に対して、因子分析（最尤法、Promax回転）を行った。因子数は、固有値の落差、因子の解釈可能性を考慮して5因子が妥当であると判断した。また、因子負荷量の絶対値が.04未満の項目は削除し、再度因子分析を行った。その結果、問6(1)、問6(2)、問6(3)、問6(7)、問6(11)、問6(12)、問6(15)、問6(20)、問7(1)、問7(3)、問7(5)、問7(10)、問7(13)、問7(14)、問7(19)、問7(20)、問7(23)、問8(1)、問8(2)、問8(3)、問8(9)、問8(14)、問8(15)、問8(16)の25項目が削除された。さらに、これらの項目を除いて同様の因子分析を行った結果、問6(4)、問6(5)、問6(6)、問7(2)、問7(4)、問8(13)の6項目が削除され、最終的に25項目5因子構造を得た。各因子の質問項目の内容を概観し、第I因子は「学校運営協議会の機能」、第II因子は「児童・生徒の非認知能力」、第III因子は「教員の地域連携・協働意識」、第IV因子は「児童・生徒の学力」、第V因子は「児童・生徒の規範意識」と名付けた。なお、下位尺度の信頼性を検討するために、因子ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=.75\sim.88$ であることから下位尺度の内的整合性は高いと判断した。因子分析結果、及び各因子の記述統計量と α 係数を表3に示す。

表2 各質問項目の平均評定測定値 (M) 及び標準偏差 (SD)

質問項目	M	SD	M+SD	M-SD
問6(1) あなたは、児童生徒の諸活動について、たより等で積極的に保護者に紹介していますか。	2.97	0.86	3.84	2.11
問6(2) 保護者や地域の人の学校支援ボランティア活動は、学校の教育水準の向上に効果がありましたか。	3.31	0.60	3.91	2.70
問6(3) あなたは、近隣等の小・中学校間で、児童生徒が交流する取組に参加しましたか。	2.87	0.95	3.82	1.92
問6(4) あなたは、近隣等の小・中学校間で、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。(教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など)	2.86	0.90	3.76	1.96
問6(5) あなたは、近隣等の小・中学校間で、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。	3.11	0.88	3.99	2.23
問6(6) あなたは、平成27年度全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の小・中学校間で成果や課題を共有しましたか。	2.66	0.96	3.63	1.70
問6(7) あなたは、学習規律の維持を徹底していますか。	3.42	0.57	3.99	2.86
問6(8) 児童生徒の基礎学力は、定着していますか。	2.88	0.52	3.40	2.35
問6(9) 児童生徒の知識や技能を活用する力は、身に付いていますか。	2.76	0.52	3.28	2.23
問6(10) 児童生徒の学習意欲は、高いと思いますか。	3.03	0.59	3.62	2.44
問6(11) 児童生徒は、学校や地域でふれあう大人の学びや考え方に刺激を受けていますか。	2.92	0.65	3.57	2.28
問6(12) あなたは授業改善に日々取り組んでいますか。	3.30	0.53	3.83	2.78
問6(13) あなたは、地域との連携・協働の意識は高いですか。	3.02	0.63	3.65	2.39
問6(14) 教職員同士での連携・協働の意識は高いですか。	3.44	0.62	4.06	2.82
問6(15) あなたは、保護者対応や児童生徒の問題行動への対応に、負担を感じていますか。	2.34	0.79	3.13	1.55
問6(16) 学校課題の解決に向けた取組に対して、保護者や地域の人の協力が得られていますか。	3.02	0.58	3.59	2.44
問6(17) 学校運営協議会による学校関係者評価に基づき、教育活動が見直されていますか。	3.14	0.59	3.73	2.55
問6(18) 学校運営協議会が授業改善にかかわることで、人材育成が図られていますか。	2.77	0.66	3.43	2.10
問6(19) 学校運営協議会で、子どもの意見を生かした協議が行われ、企画につながる可能性がありますか。	2.50	0.70	3.20	1.80
問6(20) 学校運営協議会で「めざす子ども像」について、熟議を行いましたか。	2.99	0.74	3.73	2.25
問6(21) 学校への批判や苦情が、減少傾向にありますか。	2.73	0.70	3.43	2.04
問7(1) あなたは、学校で実施された学校の美化などPTAや地域の人が行う諸活動に参加していますか。	3.20	0.69	3.89	2.52
問7(2) あなたは、地域の人材を外部講師として招聘した授業を行いましたか。	2.73	1.04	3.76	1.69
問7(3) 学校に、日常的に地域や保護者の来校がありますか。	3.20	0.76	3.96	2.44
問7(4) あなたは、授業でボランティア等のサポートを受けましたか。	2.57	1.07	3.64	1.50
問7(5) あなたは、放課後を利用した補充的な学習での指導に関わったことがありますか。	2.54	1.04	3.58	1.50
問7(6) あなたは、土曜日を利用した補充的な学習にボランティアとして関わったことがありますか。	1.50	0.77	2.27	0.74
問7(7) あなたは、長期休業日を利用した補充的な学習会に参加しましたか。	3.10	0.97	4.07	2.13
問7(8) 保護者は、児童生徒の登下校を見守る活動に積極的に参加していると思いますか。	3.03	0.77	3.80	2.27
問7(9) 地域からは、児童生徒の登下校を見守る活動に積極的に参加していると思いますか。	3.46	0.67	4.13	2.79
問7(10) 地域や近隣校と連携した、地域ぐるみの防災訓練を実施していますか。	2.69	1.02	3.71	1.66
問7(11) 児童生徒は、礼儀正しいですか。	2.91	0.63	3.54	2.29
問7(12) 児童生徒は、規則を守っていますか。	3.02	0.56	3.59	2.46
問7(13) 児童生徒の自己肯定感は、高いと思いますか。	2.76	0.59	3.35	2.18
問7(14) あなたは、児童生徒に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。	3.12	0.66	3.78	2.46
問7(15) 児童生徒は、友達との約束を守っていますか。	3.08	0.45	3.52	2.63
問7(16) 児童生徒は、思いやりがありますか。	3.12	0.53	3.64	2.59
問7(17) 児童生徒は、いじめを許さない心がありますか。	3.09	0.54	3.64	2.55
問7(18) 児童生徒は、人の役に立ちたいと考えていると思いますか。	3.10	0.58	3.68	2.53
問7(19) 児童生徒は、我慢強いですか。	2.61	0.65	3.26	1.96
問7(20) 児童生徒は、頑張り抜く力がありますか。	2.75	0.61	3.37	2.14
問7(21) 児童生徒は、優しいですか。	3.25	0.55	3.80	2.70
問7(22) 児童生徒は、人に対して親切ですか。	3.13	0.55	3.68	2.58
問7(23) あなたが児童生徒と向き合う時間は、確保されていますか。	2.85	0.70	3.55	2.14
問8(1) 児童生徒は、今住んでいる地域の行事に参加していますか。	3.20	0.63	3.83	2.58
問8(2) 児童生徒は、地域や社会で起こっている問題や出来事に関心があると思いますか。	2.81	0.63	3.45	2.18
問8(3) 児童生徒は、地域社会などでボランティア活動に参加していますか。	2.85	0.70	3.55	2.14
問8(4) あなたは、地域貢献の意識が高いほうだと思いますか。	2.71	0.68	3.39	2.03
問8(5) あなたは、「地域と共に子どもを育てていく」という意識が高いと思いますか。	2.99	0.62	3.61	2.37
問8(6) あなたは、地域と連携した取組に積極的ですか。	2.83	0.67	3.50	2.16
問8(7) 保護者は、コミュニティ・スクールについて理解しておられますか。	2.71	0.63	3.33	2.08
問8(8) 保護者や地域の人は、学校のために役立ちたいと思っていますか。	3.11	0.58	3.69	2.53
問8(9) 保護者や地域住民は、大人にとっても楽しみのある学校づくりに努めていますか。	2.57	0.68	3.25	1.89
問8(10) 保護者や地域の人は、学校の取組が地域の活性化につながっていると思っていますか。	2.93	0.61	3.54	2.32
問8(11) 保護者や地域の人は、地域にとってコミュニティ・スクールが必要だと思っていますか。	2.84	0.62	3.46	2.22
問8(12) 孤立した家庭が減っていると思いますか。	2.44	0.66	3.10	1.78
問8(13) 子育てのために、ふるさと山口県に帰ってくる家庭があると思いますか。	2.60	0.62	3.22	1.98
問8(14) 子育てがしやすい地域だと思いますか。	2.96	0.62	3.57	2.34
問8(15) あなたは、児童生徒が地域の人と一緒に学ぶ機会が増えた方がよいと思いますか。	3.28	0.59	3.87	2.69
問8(16) あなたは、勤務する学校がある地域が好きですか。	3.32	0.64	3.96	2.68

表3 因子分析結果（平均値（M），標準偏差（SD）， α 係数）

質問項目	I	II	III	IV	V	
因子Ⅰ 学校運営協議会の機能 (M=28.19, SD=4.12, α = .85)						
問6(18) 学校運営協議会が授業改善にかかわることで、人材育成が図られていますか。	.745	-.072	-.066	.086	-.068	
問8(11) 保護者や地域の人は、地域にとってコミュニティ・スクールが必要だと思っていますか。	.709	-.018	.004	-.041	-.013	
問8(10) 保護者や地域の人は、学校の取組が地域の活性化につながっていると思っていますか。	.649	.052	.066	-.056	-.002	
問6(17) 学校運営協議会による学校関係者評価に基づき、教育活動が見直されていますか。	.618	.018	.0	-.003	-.013	
問8(07) 保護者は、コミュニティ・スクールについて理解しておられますか。	.611	-.022	.106	-.045	.042	
問8(08) 保護者や地域の人は、学校のために役立ちたいと思っていますか。	.602	.155	.029	-.12	-.015	
問6(19) 学校運営協議会で、子どもの意見を生かした協議が行われ、企画につながることがあります。	.583	-.063	-.063	.127	-.058	
問6(16) 学校課題の解決に向けた取組に対して、保護者や地域の人の協力が得られていますか。	.551	.063	.002	.04	-.005	
問8(12) 孤立した家庭が減っていると思いますか。	.439	-.023	-.024	.011	.067	
問6(21) 学校への批判や苦情が、減少傾向にありますか。	.408	.013	.015	.01	.131	
因子Ⅱ 児童・生徒の非認知能力 (M=18.78, SD=2.53, α = .88)						
問7(21) 児童・生徒は、優しいですか。	-.049	.954	-.016	-.01	-.102	
問7(22) 児童・生徒は、人に対して親切ですか。	-.02	.907	-.016	-.036	-.037	
問7(16) 児童・生徒は、思いやりがありますか。	-.035	.809	-.023	.021	.021	
問7(18) 児童・生徒は、人の役に立ちたいと考えていると思いますか。	.069	.572	.039	.025	.029	
問7(17) 児童・生徒は、いじめを許さない心がありますか。	.051	.571	.012	.063	.065	
問7(15) 児童・生徒は、友達との約束を守っていますか。	.086	.425	.012	-.007	.202	
因子Ⅲ 教員の地域連携・協働意識 (M=11.55, SD=2.16, α = .85)						
問8(06) あなたは、地域と連携した取組に積極的ですか。	.001	-.02	.862	-.018	-.009	
問8(05) あなたは、「地域と共に子どもを育てていく」という意識が高いと思いますか。	.021	.05	.803	-.017	-.042	
問8(04) あなたは、地域貢献の意識が高いほうだと思いますか。	-.044	-.038	.767	.011	.053	
問6(13) あなたは、地域との連携・協働の意識は高いですか。	.118	-.006	.577	.083	-.031	
因子Ⅳ 児童・生徒の学力 (M=8.67, SD=1.34, α = .75)						
問6(08) 児童・生徒の基礎学力は、定着していますか。	-.041	.009	.028	.762	.003	
問6(09) 児童・生徒の知識や技能を活用する力は、身に付いていますか。	.089	-.05	-.002	.731	-.009	
問6(10) 児童・生徒の学習意欲は、高いと思いますか。	-.018	.215	.002	.526	.019	
因子Ⅴ 児童・生徒の規範意識 (M=5.94, SD=1.10, α = .83)						
問7(12) 児童・生徒は、規則を守っていますか。	-.018	.065	-.021	-.011	.862	
問7(11) 児童・生徒は、礼儀正しいですか。	.01	.12	.012	.025	.695	
因子間相関	I	—				
	II	.486	—			
	III	.581	.377	—		
	IV	.402	.489	.342	—	
	V	.407	.623	.324	.433	—

相関係数は $\leq .01$ で有意

3. 結果の分析・考察

この調査は、管理職ではない教員を対象とした調査である。多くは学級担任であり、児童・生徒や保護者、地域住民と日常的に関わっている。したがって、この質問紙調査は、教員の視点からみたコミュニティ・スクールの取組による児童・生徒への影響や保護者・地域住民への影響を測ることができると思う。以降は、コミュニティ・スクールの導入期間（コミュニティ・スクールに指定されてから平成28年度末までの期間、以下CS期間）ごとに分析・考察を行っていく。

3-1 学校運営協議会機能

この因子は、10の質問項目から構成されている。それぞれの項目をみると、学校運営協議会があることによって教員や保護者、地域への影響が生じると考えられるため、学校運営協議会が果たした機能としてとらえ「学校運営協議会機能」と名付ける。

「学校運営協議会機能」においては、CS期間の主効果が有意であった（ $F(9, 3890) = 9.40, P < .001$ ）。この因子におけるCS期間ごとの平均値を表4に、グラフを図2に示す。また、Bonferroniによる多重比較の結果を表5に示す。

8年目と9年目の平均値は、1～6年目の平均値と有意に差がある（有意水準 .05）。得点のグラフを見ても、最小値が2年目、最大値が8年目と9年目であることから、相対的にCS期間が長くなると得点が上がるといえる。しかしCS期間が10年以上では平均値が下がり、他の期間と有意差が見られなくなっている。

表4 学校運営協議会機能とCS期間

CS期間	平均値	度数	標準偏差
1年目	27.7	315	3.9
2年目	27.5	394	4.1
3年目	28.5	509	4.3
4年目	27.8	672	3.9
5年目	28.1	1401	4.2
6年目	28.6	316	3.8
7年目	29.1	67	3.7
8年目	30.7	52	4.0
9年目	30.7	81	4.1
10年以上	29.0	93	4.1

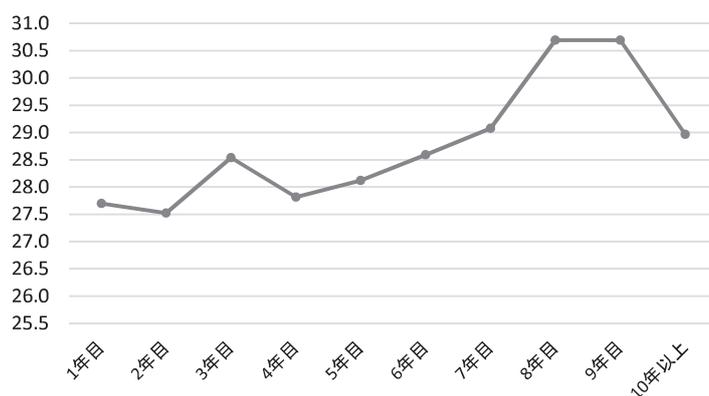


図2 学校運営協議会機能とCS期間

表5 CS期間における学校運営協議会機能の平均値の有意確率

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年以上
1年目	—	1.00	.18	1.00	1.00	.27	.54	.00	.00	.37
2年目		—	.01	1.00	.47	.03	.18	.00	.00	.10
3年目			—	.11	1.00	1.00	1.00	.01	.00	1.00
4年目				—	1.00	.24	.71	.00	.00	.47
5年目					—	1.00	1.0	.00	.00	1.00
6年目						—	1.00	.03	.00	1.00
7年目							—	1.00	.74	1.00
8年目								—	1.00	.66
9年目									—	.25
10年以上										—

3-2 児童・生徒の非認知能力

この因子は、6の質問項目から構成されている。それぞれの項目をみると、児童・生徒の「優しさ」「思いやり」「いじめを許さない」など非認知能力といわれるものが多いため、この因子を「児童・生徒の非認知能力」と名付ける。

「児童・生徒の非認知能力」においては、CS期間の主効果が有意であった（ $F(9, 3890) = 4.48, P < .001$ ）。この因子におけるCS期間ごとの平均値を表6に、グラフを図3に示す。また、Bonferroniによる多重比較の結果を表6に示す。

1年目に比べて平均値が有意に高くなっている。また、最小値である4年目の平均値と9年目の平均値には有意に差がみられる（有意水準 .05）。8年目が最大値であり、CS期間が長いほうが値は高くなっているが、10年以上では8、9年目との有意差はみられないものの平均値は下がっており、最小値である4年目とも有意な差がみられなくなっている。

表6 非認知的能力とCS期間

CS期間	平均値	度数	標準偏差
1年目	19.2	315	2.4
2年目	18.6	394	2.5
3年目	18.9	509	2.6
4年目	18.5	672	2.5
5年目	18.6	1401	2.6
6年目	19.0	316	2.4
7年目	18.9	67	2.5
8年目	19.7	52	2.5
9年目	19.6	81	2.3
10年以上	19.1	93	2.6

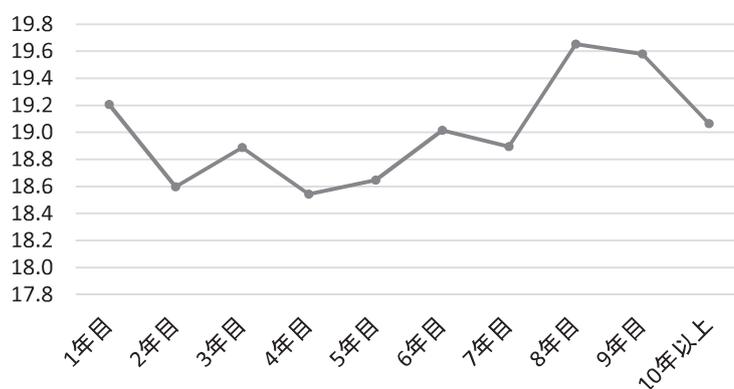


図3 非認知的能力とCS期間

表7 非認知能力におけるCS期間ごとの平均値の有意確率

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年以上
1年目	—	.06	1.00	.01	.02	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
2年目		—	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	.21	.06	1.00
3年目			—	.88	1.00	1.00	1.00	1.00	.99	1.00
4年目				—	1.0	.27	1.00	.10	.02	1.00
5年目					—	.85	1.00	.21	.06	1.00
6年目						—	1.00	1.00	1.00	1.00
7年目							—	1.00	1.00	1.00
8年目								—	1.00	1.00
9年目									—	1.00
10年以上										—

3-3 教員の地域連携・協働意識

この因子は、4の質問項目から構成されている。それぞれの項目をみると、教員自身の地域連携・協働の意識を問うものであるため、「教員の地域連携・協働意識」と名付ける。

「教員の地域連携・協働意識」においては、CS期間の主効果が有意であった（ $F(9, 3890) = 4.85, P < .001$ ）。この因子におけるCS期間ごとの平均値を表8に、グラフを図3に示す。また、Bonferroniによる多重比較の結果を表9に示す。

8年目の平均値は、1年目、4年目の平均値よりも有意に高く、4年目の平均値は、3年目、7年目、8

年目、9年目の平均値よりも有意に低い（有意水準 .05）。概ね、CS期間が長いほうが平均値が高くなる傾向にあるが、10年以上では平均値が下がり、最小値である4年目と有意な差は見られない。

表8 地域連携・協働意識とCS期間

CS期間	平均値	度数	標準偏差
1年目	11.4	315	2.2
2年目	11.5	394	2.1
3年目	11.8	509	2.2
4年目	11.3	672	2.1
5年目	11.5	1401	2.2
6年目	11.8	316	1.8
7年目	12.2	67	2.4
8年目	12.5	52	2.1
9年目	12.1	81	2.1
10年以上	11.7	93	2.1

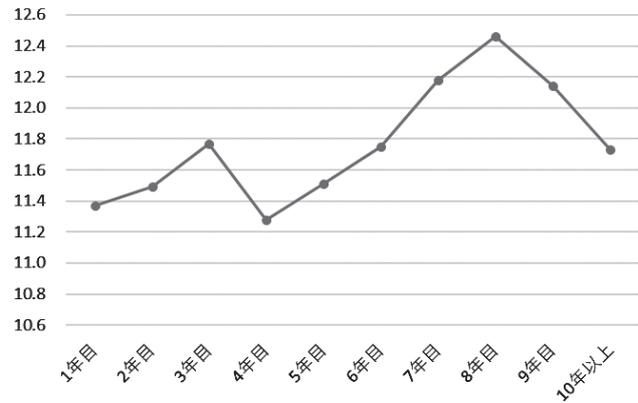


図4 地域連携・協働意識とCS期間

表9 地域連携・協働意識におけるCS期間ごとの平均値の有意確率

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年以上
1年目	—	1.00	.39	1.00	1.00	1.00	.22	.03	.18	1.00
2年目		—	1.00	1.00	1.00	1.00	.71	.10	.65	1.00
3年目			—	0.00	.95	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
4年目				—	.84	.06	.05	.01	.03	1.00
5年目					—	1.00	.61	.08	.52	1.00
6年目						—	1.00	1.00	1.00	1.00
7年目							—	1.00	1.00	1.00
8年目								—	1.00	1.00
9年目									—	1.00
10年以上										—

3-4 児童・生徒の学力

この因子は、3の質問項目から構成されている。それぞれの項目をみると、児童・生徒の基礎学力、活用する力、学習意欲を問うものであるため、「児童・生徒の学力」と名付ける。

「児童・生徒の学力」においては、CS期間の主効果が有意であった（ $F(9, 3890) = 4.01, P < .001$ ）。この因子におけるCS期間ごとの平均値を表10に、グラフを図5に示す。また、Bonferroniによる多重比較の結果を表11に示す。

1年目よりも3年目、4年目の平均値は有意に低く、最小値である。また、9年目の平均値は、2～5年目、7年目、10年以上と比べ有意に高い（有意水準 .05）。CS期間が長い8年目が最大値であり、2～5年目よりも有意に平均値が高いことから、CS期間が長いと学力も高いと考えられる。しかしながら、10年以上になると平均値が下がり、有意な差があまりみられない。

表10 学力とCS期間

CS期間	平均値	度数	標準偏差
1年目	8.84	315	1.254
2年目	8.66	394	1.366
3年目	8.54	509	1.402
4年目	8.54	672	1.335
5年目	8.68	1401	1.321
6年目	8.81	316	1.312
7年目	8.52	67	1.45
8年目	8.79	52	1.499
9年目	9.22	81	1.405
10年以上	8.57	93	1.183

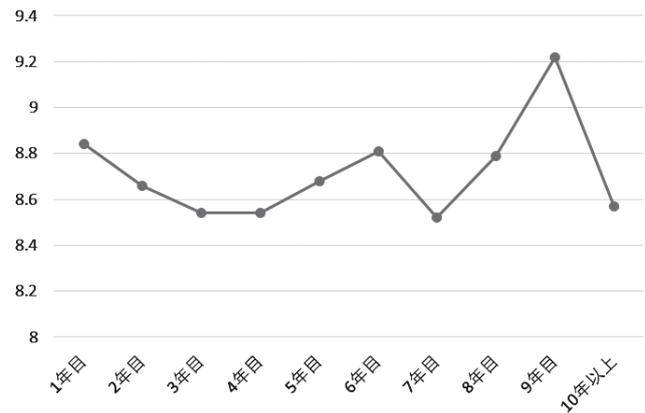


図5 学力とCS期間

表11 学力におけるCS期間ごとの平均値の有意確率

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年以上
1年目	—	.77	.05	.03	.66	1.00	.75	1.00	.40	.78
2年目		—	.92	.90	1.00	.90	1.00	1.00	.02	1.00
3年目			—	1.00	.52	.11	1.00	.96	0.00	1.00
4年目				—	0.40	.08	1.00	.95	0.00	1.00
5年目					—	.86	.99	1.0	.02	1.00
6年目						—	.84	1.0	.29	.87
7年目							—	.99	.05	1.00
8年目								—	.72	1.00
9年目									—	.04
10年以上										—

3-5 児童・生徒の規範意識

この因子は、2の質問項目から構成されている。「児童・生徒は、規則を守っていますか」の因子負荷量が高いことから、「児童・生徒の規範意識」と名付ける。

「児童・生徒の規範意識」においては、CS期間の主効果が有意であった ($F(9, 3890) = 5.59, P < .001$)。この因子におけるCS期間ごとの平均値を表12に、グラフを図6に示す。また、Bonferroniによる多重比較の結果を表13に示す。

最小値は2年目の平均値、最大値は8年目の平均値であり、有意差がある。また、1年目の平均値と2年目及び4～6年目の平均値、8年目、9年目の平均値と4～6年目の平均値にも有意差がみられる(有意水準.05)。1年目をのぞけば、CS期間の長い8年目、9年目の平均値が有意に高いことから、CS期間の長い学校の得点が高くなっているといえる。しかしながら10年以上の平均値は、8年目、9年目よりも下がっており、最小値である2年目の平均値と有意差がなくなっている。

表12 規範意識とCS期間

CS期間	平均値	度数	標準偏差
1年目	6.16	315	0.97
2年目	5.88	394	1.04
3年目	6.00	509	1.11
4年目	5.89	672	1.08
5年目	5.87	1401	1.13
6年目	5.85	316	1.07
7年目	6.09	67	1.16
8年目	6.48	52	1.21
9年目	6.32	81	0.95
10年以上	6.09	93	1.27

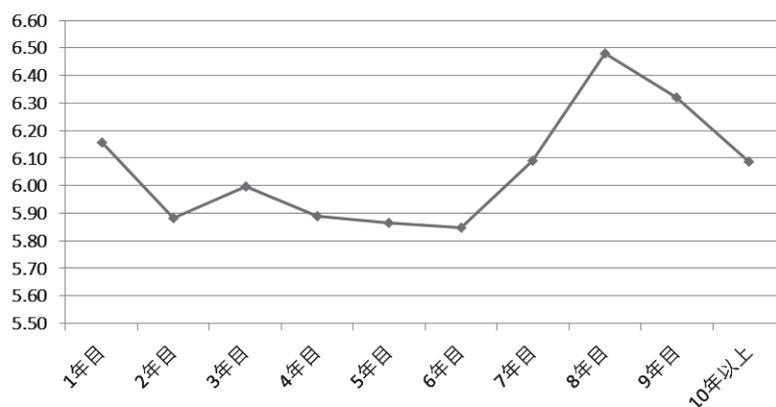


図6 学力とCS期間

表13 規範意識におけるCS期間ごとの平均値の有意確率

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年以上
1年目	—	.03	.60	.01	.00	.02	1.00	.61	.97	1.00
2年目		—	.85	1.00	1.00	1.00	.91	.01	.03	.84
3年目			—	.81	.36	.66	1.00	.08	.29	1.00
4年目				—	1.00	1.00	.92	.01	.03	.84
5年目					—	1.00	.83	.00	.01	.68
6年目						—	.83	.01	.02	.71
7年目							—	.65	.96	1.00
8年目								—	1.00	.54
9年目									—	.92
10年以上										—

3-6 コミュニティ・スクールの効果とCS期間

因子 I～Vの合計を「コミュニティ・スクールの効果」（以下、CS効果）と名付ける。CS効果においては、CS期間の主効果が有意であった ($F(9, 3890) = 7.78, P < .001$)。「CS効果」におけるCS期間ごとの平均値を表14に、グラフを図7に示す。また、Bonferroniによる多重比較の結果を表15に示す。

表14 CS効果とCS期間

CS期間	平均値	標準偏差	度数
1年目	73.26	7.94	315
2年目	72.16	8.81	394
3年目	73.73	9.24	509
4年目	72.06	7.99	672
5年目	72.83	8.89	1401
6年目	74.02	8.22	316
7年目	74.76	8.61	67
8年目	78.08	9.41	52
9年目	77.95	8.16	81
10年以上	74.42	8.01	93

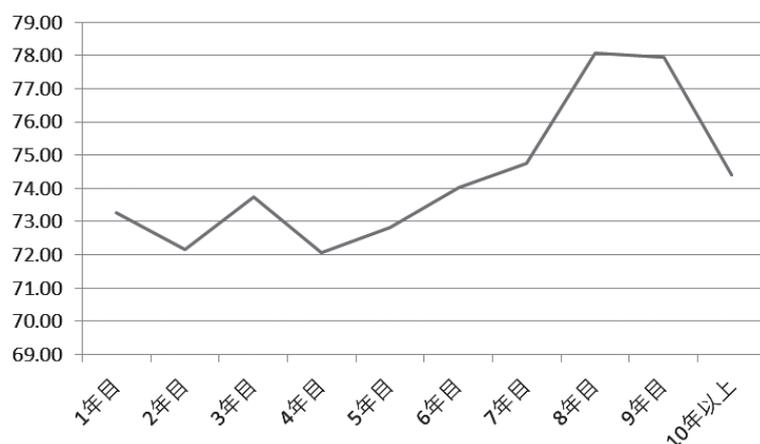


図7 CS効果とCS期間

表15 CS効果におけるCS期間ごとの平均値の有意確率

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年以上
1年目	—	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	.01	.00	1.00
2年目		—	.29	1.00	1.00	.19	1.00	.00	.00	1.00
3年目			—	.04	1.00	1.00	1.0	.02	.00	1.00
4年目				—	1.00	.04	.65	.00	.00	.60
5年目					—	1.00	1.00	.00	.00	1.00
6年目						—	1.00	.07	.01	1.00
7年目							—	1.00	1.00	1.00
8年目								—	1.00	.64
9年目									—	.32
10年以上										—

CS効果の平均値の最大となるのは8年目と9年目であり1～5年目と有意に差がある。したがって、概ねCS期間が長いとCS効果は高いといえる。

4. 成果と課題

教員（教諭・助教諭）を対象とした質問紙調査の統計的な分析を試みた。分析の結果から得た「学校運営協議会機能」「児童・生徒の非認知的能力」「教員の地域連携・協働意識」「児童・生徒の学力」「児童・生徒の規範意識」の5つの因子は、CS期間が長くなれば得点が上昇することから、コミュニティ・スクールの効果といえる。また、「学校運営協議会機能」は、学校運営を充実に資するものである。また、「児童・生徒の学力」「児童・生徒の非認知的能力」「児童・生徒の規範意識」は、子供の人格形成に関わるものであり、「教員の地域連携・協働意識」は教員の意識改革につながるものである。このように整理すると、これらは学校目標に深く関わるものであることから、学校評価に資するものにもなると考えられる。

一方、CS効果は、期間が長くなれば効果が大きいと予想していた。概ねその傾向はみられるのであるが、10年目以上となると1～5年目までと有意な差がなくなる。また、4年目に落ち込むことも見逃せない。こうした状況になる要因としては、学校運営協議会の中心を担う管理職の異動や委員の交代、取組の形骸化やマンネリ化などが考えられる。そもそもコミュニティ・スクールの強みは、持続可能な教育活動を展開できることであるため、大きな問題である。今後さらなる考察が必要である。

おわりに

筆者は、いくつかの学校運営協議会に関わり、児童・生徒たちの成長をみてきた。地域の行事に関わり、積極的に取り組んだり、地域の人との共同作業を楽しんだり、普段できない体験をさせてもらったりするなかで、子供たちが生き生きと活動する姿を見てきた。また、地域の人たちが子供からのあいさつを心待ちにしたり、子供と関わることを楽しみにボランティアに参加したりする姿をみてきた。コミュニティ・スクールには確かに、子供を中心として地域住民を結び付ける力をもっていると感じている。こうした成果を多くの人が認識すること、実感することは、学校を核とした地域づくりの促進につながるものと考えられる。

引用文献

- 1) コミュニティ・スクールの推進等に関する調査研究協力者会議：「コミュニティ・スクールを核とした地域とともにある学校づくりの一層の推進に向けて～全ての学校が地域とともにある学校へと発展し、子どもを中心に据えて人々が参画・協働する社会を目指して～」報告書，平成27年3月，P4，
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/03/20/1356133_1_3.pdf，2018.08.02 access.